

もっと知ろうよ ICA 7 ICA大会

今年9月2～7日、中国・北京で第13回 ICA大会が開催される。全史料協もそのためのツアーを企画して、ここに数十人規模の代表団を送る予定だ。今回は、このICA大会のことを見てみたい。

大会といえば、まずICAの始まりを1950年の第1回パリ大会とする考え方と、ユネスコの提唱で主だったアーキビストがパリに集まり、ICAの規約案の採択を行った1948年とする考え方の2通りがある。現在はICA規約により、大会は4年に1度開催される。だが、ICA発足のころは違った。1950年に第1回（パリ）、1953年に第2回（ハーグ）、1956年に第3回（フィレンツェ）と、3年ごとに開催されていた。それに1966年にワシントンでは臨時大会が開催されたこともある。

ICA大会がICAという組織の中で占める位置は重要だ。それは、大会にあたって必ずICA総会が開催されるからである。総会は、ICAの最高議決機関である。総会にはICAの会員がすべて参加し、次の大会開催までのICAの活動方針を審議・決定する。予算や会費（分担金）の金額が決定されるのも、この総会である。ICAの規約や手続きをみていくと、総会の開催3か月前には、総会にかかる資料はICA事務局に届けなければいけないし、1か月前までには会員に対し資料が送付される。だから、総会は、会員がすでに資料に目を通してきていることを前提として議事が進められていく。総会会場には、国名がアルファベット順で掲示された席が設けられる。そこに着席するのは、投票権をもつ会員の代表だけだから、通常は1か国あたり1名か2名だ。通訳の席はない。議場正面に

は、ICAの会長以下副会長、会計官、事務総長、事務局と総勢10名近くが着席し、どんどん議事を進めていく。それでも、時にはそうした手続きに不案内な会員から、「こんな大量の資料をいきなり配って、さあイエスカノーかというのは、あんまりじゃないか」などと異議が出されることもある。考え方の異なる人々が一堂に会していることや、この地球の広がり、人類の多様性を肌で感じるの、この様な場面だ。

もちろん、ICA大会は、総会だけではない。開会式、閉会式、全体会とよばれる研究発表会、文書館や史跡見学ツアー、そして夜は毎晩のようにパーティやレセプションが設定されている。空き時間を利用して、独自の観光をするのも楽しい。また、会議場にいれば、世界中のアーキビストと会える。

北京大会では、9月2日の午前中にEASTICA東アジア地域支部の会合が設定され、日本からの参加者を待っている。ここでは97年に日本で開催されるEASTICA総会のプログラムが決定されるはずだ。そして、9月2日午後には、開会式。恐らくは政府要人を招いての華やかな会合となるだろう。翌日から始まる全体会や商品見本市、歌と踊りのレセプションは、中国人好みのカラオケパーティかも知れない。勉強したい人のためには大会前のセミナー、もっと中国を楽しみたい人のためには、大会後のツアーも用意されている。ICA大会は、アーキビストのお祭り、なのである。北京では、「20世紀を締めくくる文書館活動」が大会テーマとされている。

(小川千代子 国際資料研究所)